

(点検・評価の結果および改善の具体的方策)

連携大学院は、生命科学専攻の設置にともなって導入されたものであり、その成果を評価するには時期尚早であり、今後検証していくことが必要である。

現時点で、特に改善すべき大きな問題はない。

7.2.3.3 教育方法のあり方

<2003年度に設定した目標>

1. 少人数クラスによる緊密な教育指導

【評価項目 6-3-1】 授業形態と授業方法の関係

(必須要素) 授業形態と授業方法の適切性、妥当性とその教育指導上の有効性

(必須要素) マルチメディアを活用した教育の導入状況とその運用の適切性

(必須要素) 「遠隔授業」による授業科目を単位認定している大学・学部等における、そうした制度措置の運用の適切性

(現状の説明)

授業形態や授業方法は各教員の判断にまかされている。授業は少人数クラスで行われている。特に研究指導は、先端的な研究活動の実践を通してマンツーマンで行われる。研究指導の成果として、レフェリー付英語学術雑誌への論文発表や学会発表などが多数ある(「7.2.5 研究活動と研究環境」参照)。

マルチメディアを活用した教育は、パワーポイントを用いた授業、ネットワークを介したパワーポイント資料の提供、eメールによる質問の受付などが一部の教員により行われている。また、研究室内のゼミなどでは、マルチメディアを利用した学生の発表も行われている。

「遠隔授業」は理工学研究科では実施されていない。

(点検・評価の結果および改善の具体的方策)

授業形態と授業方法については適切、妥当と判断できる。少人数で質問、議論等も活発に行われており、その教育指導上の有効性は高いと言える。マルチメディアを活用して有効な授業もあれば、別段それを利用する必要のないものもある。現状はそれぞれの授業に適して利用されていると判断できる。特に問題はない。

7.2.3.4 教育成果のあり方

<2003年度に設定した目標>

1. 教育効果の測定法の確立

2. 後期課程修了者の研究者、高度専門職への就職の促進